

2016年9月30日

博報財団 第10回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	HOLMBERG Ryan Eric(ホームバーグ ライアン エリック)
在住国名	アメリカ
所属・役職	セインズベリー日本藝術研究所
招聘回(招聘研究期間)	第10回(2015年9月1日～2016年8月31日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	劇画ポップス:戦後日本のマンガにおける美術と大衆文化の交流
研究目的	戦後日本のマンガにおける文化の位置を再検討するために、1945年から1975年の間にマンガ家がどのようにアメリカの大衆文化を吸収し、美術家がどのようにマンガ表現を用いてアメリカ文化と対峙し思考したのかを検討し、戦後マンガの中にある日本独自のポップアートの展開を考察します。

研究概要:

戦後日本のマンガにおける文化の位置を再検討するために、1945年から1975年の間にマンガ家がどのようにアメリカの大衆文化を吸収し、美術家がどのようにマンガ表現を用いてアメリカ文化と対峙し思考したのかを検討しました。テレビ、流行歌、コミックスとの関係を中心に、連合軍占領下におけるアメリカ文化の多量流入、在日米軍基地問題とベトナム反戦運動、日本の娯楽産業におけるアメリカのコンテンツの利用などの歴史的背景の分析を通して、社会史的な視点からマンガ表現史を捉え直しました。手塚治虫、杉浦茂、林静一、佐々木マキ、つげ義春、大伴昌司、篠原有司男、田名網敬一といったマンガ家と美術家を取り上げながら、戦後マンガの中にある日本独自のポップアートの展開を考察してきました。

国際フェローとしての滞在期間中には、早稲田大学図書館、国家図書館、東京都立図書館、東京国立近代美術館のアートライブラリー、現代マンガ図書館などの、日本国内にあるアーカイブを多く調査しました。林静一、佐々木マキ、つげ義春、高野慎三、田名網敬一などのマンガ家、マンガ編集者、やアーティストのインタビューを行いました。今回の研究を最終的には研究書として纏めたいと考え、現在では下記の文章を発表しました。

1. “A Vogue for I Don’t Get It: Hayashi Seiichi vs. Sasaki Maki, 1969,” The Comics Journal (December 2015)
「わからないのが流行する:林静一と佐々木マキ」ネット版『コミックス・ジャーナル』(2015年12月)
2. “Singing Our Own Song: Hayashi Seiichi vs. Sasaki Maki, 1969,” The Comics Journal (January 2016)
「みずからの歌を唄って:林静一と佐々木マキ」ネット版『コミックス・ジャーナル』(2016年1月)
3. “When Manga Was Pop,” Art in America (January 2016)
「ポップアートはマンガであった時代」『アート・イン・アメリカ』(2016年1月)
4. “Hayashi Seiichi’s Pop,” in Hayashi Seiichi, Red Red Rock and Other Stories, 1967–70 (London: Breakdown Press, 2016)「林静一のポップ」『まっかつかロック:林静一短編集、1967–1970』(2016年6月)
5. “Comics and Japanese Psychedelia: An Interview with Tanaami Keiichi,” The Comics Journal (September 2016)
「コミックスと日本サイケ:田名網敬一とのインタビュー」 ネット版『コミックス・ジャーナル』(2016年9月)

研究発表:

1. 「活字声優としてのマンガ翻訳論」日本マンガ学会海外マンガ交流部会第9回例会「海外マンガと翻訳」
専修大学(神保町)2016年7月30日
2. 「東西漫画談義:林静一との対談」COMIC ART TOKYO、333アーツ千代田(秋葉原)2016年7月31日

展望:

2016–17年度には、デューク大学視覚文化部で客員助教授として在籍して、幸い教える授業は国際フェローとしての研究内容と重なります。滞在期間中の調査を学術的文章に纏めて、最終的に研究書として刊行したいと考えております。同時に、研究対象になっていたマンガ家の英語翻訳を今後も続けたいと思い、滞在中の調査や取材は翻訳本の解説としても発表します。